

## 東日本大震災 復興の検証 どのようにして「惨事便乗型復興」 を乗り越えるか(合同出版)

元山形大学農学部教授の綱島不二雄編著「東日本大震災 復興の検証」どのようにして「惨事便乗型復興」を乗り越えるか(合同出版)2016年6月)が出版されました。

### 「惨事便乗型復興」

「東日本大震災から早くも5年が経過しようとしている。

被災者の復興は大幅におくれ、いまだ仮設住宅には40%の被災者が居住を強いられたままである。

ふるさとを離れ、借りた小学校で過した子ども達は、そのまま中学生になろうとしている。

その一方では、防潮堤、沿岸道路の嵩上げ、高速道路の延伸、大規模盛土市街地造成といった巨大な土木工事は着々と振興している。これが5年の歳月と26兆円をかけた国の復興政策の現状である。

しかも、居住制限を

かけた地域の50%の土地が、その用途がまったく決まらぬまま放置されるという「復興」の名にも値しない現状である。…」

綱島氏は編著の「はしがき」でこう書き出しています。

### 憲法にもとづく「人間の復興」

大企業にビジネスチャンスを提供する安倍内閣流の「惨事便乗型復興」と「人間の復興」が対比され、現場からの告発が強く訴えとなつて読むものを引きつけます。

政策的にも国と自治体のありようについて、非常に重要な指摘が随所に盛り込まれています。

日本は災害多発国であり、被害の甚大な地震は4、5年ごとに起きており、火山災害や水害、土砂災害など氣象災害は毎年のように起きています。

鶴岡市は全国で16番目と地震発生確率の高い庄内平野東縁断層帯が藤島を通

## 私の昭和 35

鈴木重雄(88歳・八色木)

### 農協勤務②

八栄島村農協の事務所は役場と一緒で廊下を挟んで分かれていた。初出勤の日である。

紺色の木綿ズボンにムズリ(作務衣)、兵児帯(ヘコオビ)を締めて出勤した。

購買係である。アメ色の机が準備され、窓際のカウンターに横向きに座り、隣に主任の鈴木清太郎さんがいた。彼は長年鶴岡の老舗の金物屋に勤め、主に学校の教材用の道具を納めていたので、学校の特徴や先生の名前を知っている商才に優れた人であった。「学校に行ったら、職員室に掲げ

てある名前を覚えることだ」と言っていた。小柄で色白、弁舌さわやか、頭の切れる人で少量の酒で赤顔になり「色男、金と力はなかりけり」と言つて笑わせた。のちに農協を退職し、藤島駅前通りに金物店を開いた商

人であった。技術員の斎藤さんは動物好きで、馬の話や綿羊の飼育を得意としていた。何しろ酒が入ると気が荒くなるので付き合いに苦労した。彼は3年くらいで退職し、北海道に渡り農林統計事務所勤務に就いたと聞いている。酒付きの彼が酒を断つた

と聞いた。よほど心境の変化があったと思つた。退職後故郷の庄内町で余生を送つた。

水牛も発病し約40頭を処分、4頭を沖繩県竹富島に預けていました。

その4頭を鶴岡市に導入するため、当面9月に酒田市手倉田の酪農家に預ける予定でした。

しかし、口蹄疫を心配する畜産農家の反対の声が大きく、外国原産の水牛と県産和牛振興との整合性などが問題視され、導入計画は撤回されました。

## 県が水牛の導入を撤回 県産和牛振興との整合性など

県畜産振興課で導入を検討していた「水牛」について、県から20日、JA庄内たがわに撤回する旨の報告があったとのこと。

この計画は、鶴岡市のイタリアンレストラ「アル・ケツチャー」に勤めるチーフ職人の竹島英俊氏が奥田

政行シエフと共に、水牛のミルクを使ったモツツアレラチーズ生産のための水牛導入について3月、県に支援と助成を申請していたものです。

竹島氏は宮崎県で水牛を飼育していました。2010年に宮崎県で発生した口蹄疫に

# 昭和も遠く16 中町・成澤功 生きて虜囚の辱しめを受けず②

私の高校同級生に東渡前から鶴岡に通学していた齋藤重徳君が居た。重徳君には6歳年上の長兄が居た。

清太郎さんという(1922(大正11)年〜2005(平成17)年)。

その長兄に赤紙が来た。昭和18年、直ちに最前線のサイパンに送られる。ろくに戦う間もなく守備隊全滅。当時大本営発表は玉碎と表現した。言葉のごまかしである。当然東渡前の齋藤家に清太郎戦死の公報が届いた。葬式を済ませ3年経った昭和22年、清太郎さんは東渡前に戻って来たのである。

清太郎さんはサイパンで奇跡的に助かり、同僚と2人で野戦包帯所の洞窟に隠れていた。惜しくも一緒に逃げた仲間が川に水汲みに行った時に米軍の射撃で戦死したとのこと。

清太郎さんは、その時の砲弾の小さな破片が頭や顔を傷つけ負傷した。傷に大きな蛆がわいたりしたが、その傷跡を潮水できれいに消毒し化膿を防いだそうだ。清太郎さんは日本が敗戦国となった事実も知らされぬまま、この洞窟で身を潜めたまま

何とか2年間生き延びた。

身の回りのあらゆる動植物を口に入れ、雨が降って植物の葉の上には水滴が貯まるのを舐めたり吸ったりして喉の渇きを防いだ。

その後、昭和21年12月に浦賀港に復員。上野から羽越線に汽車に乗ったのだが、藤島駅をやり過ぎし次の西袋駅で降りたとのこと。

西袋に自分の姉が嫁入りしていた。その姉に会うためである。藤島駅で降車しなかったのにはもう一つの理由があった。

自宅には未婚の妹が残っていた。家の跡取りの自分が死んで、農作業の人手が足りず、妹に婿養子を迎える可能性があると考え、西袋の姉に会い、留守だった4年間の諸事情一切を自分の頭の中に

## 「いつも権力の反対側」 永六輔さん逝く

—しんぶん赤旗を読んで 青山崇

7月7日83歳であった。「上を向いて歩こう」涙がこぼれないように／思い出す春の日／一人ぼつちの夜」に始まり、「悲しみは月の影に／上を向いて歩こう」涙がこぼれないように／泣きながら歩く／



(写真) 1994(平成6)年4月19日、グアム島サイパンでの慰霊祭に出席し、洞窟の前で懐かしむ齋藤清太郎さん

入れておかねばと深慮しての行動でしょう。しかし、妹はすでに嫁に行っていて家には居なかったのです。重徳君は跡取りとなるため旧制鶴岡中学(現・鶴岡南高校)を中退したが、長兄が帰ってきたことから復学が認められた。

戦争では表記の戦陣訓が言われた。捕虜になるなら覚悟して自決せよ。何とむごい言い草でしょうか。戦死報告後に本人が生きて帰ってきた2つの事例です。(おわり)

一人ぼつちの夜／一人ぼつちの夜」で終わる『上を向いて歩こう』55年前の1961年、永さん作詩で九ちゃん(永さん)が歌い、日本人ならすぐ口ずさむ歌である。『今日は赤ちゃん』、『昔せなら手をたたこう』

など国民の心の歌を沢山贈ってくれた。また多くの名言を残した。「資本主義といえば、経済の弱肉強食を認めることですよね。それなら政治には、せめて弱者救済をしてもらわなければいけない」と辛らつである。そつくりアベ政治に送りたい。



### 施設の修繕に期待

俺にとつては今年が合併して10年目か・それを過ぎたのかは判らなくても困らないのだ。困るのは合併して良くなつたものがないという合併当初の話が、今も続いているのでは? ということなんだ。

▲藤島町に大きく立派な体育館が出来る。こけら落としに何をやるうかと、役場職員全員に意見を募つたのだった。俺の他にもいたと思うが、俺はNHKのどど自慢がいいと書いた。

▲そのせいか新しい体育館でのど自慢は行われ、楽しい模様は全国に放映されたのだった。それで、この体育館の現状やイカに。

▲体を動かし汗をかくのが好きなものだから、当時から体育館は利用させてもらっている。行きたびごとに、利用

念が込めてある。敗戦直後の日本、物はなかつたが自由な空気を吸って、何よりも平和憲法を握って輝いて生き、各界で新しい分野を拓いた、今80歳代の仲間たちが、永さんも含め去り逝くのは惜しまれる。

7月12日82歳で逝去した大橋巨泉さんは週刊現代「7月9日号に、「安倍晋三の野望は恐ろしいものです。選挙民をナメている安倍晋三に一泡吹かせて下さい」が「遺言」になったという。

を記録しているから、それを数えると2500回を超える利用回数だ。これだけ通わせて貰っても年間100回・つまり週2回行けば1回分は60円程だから安いものです。とは何時かも書いたかな。

▲藤島の体育館は施設が充実しているらしい。他の同じような施設を使つたことがある人の話だ。だからか・利用者が多いと言う。そのせいもあるのか、水飲み場が壊れて何年か経つが、今度はトイレに使用不可能の紙が貼られ出した。グラウンドゴルフ場のトイレにも。

▲市民の娯楽と融和、健康維持の施設だから早速修繕しなければならぬと考えているんだらうが、今までは遅々として・・・の模様。今は、藤島庁舎のトップも体育施設に関するトップも元藤島の職員だとのことだから、俺としてここは多くを期待したい処だ。(石川)



追悼 永六輔さん

## いつも権力の反対側

戦後の放送の単けで、番組制作や制作子能を担った永六輔さんが7月7日、83歳の生涯に幕を閉じた。

1938年、東京、浅草の音楽学校で生まれてから、戦時中、放送作家デビュー。テレビ番組制作や制作子能を担った永六輔さん。戦後の放送の単けで、番組制作や制作子能を担った永六輔さんが7月7日、83歳の生涯に幕を閉じた。

しんぶん赤旗日曜版 7月24日号から